



# Social Designer

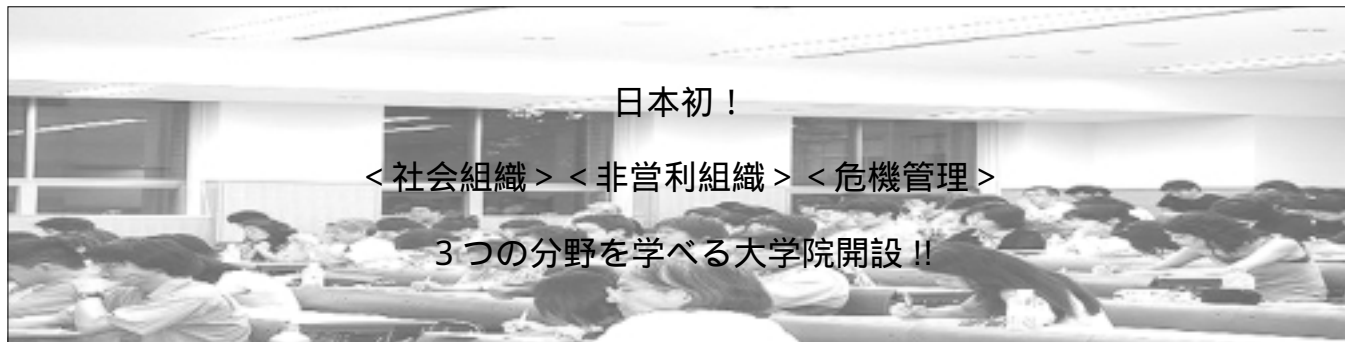
## Contents

- P.01. 21世紀社会デザイン研究科設立理念
- P.02. Interview/ 院生生活24時間
- P.03. 教授 KIKOH/ 院生研究あれやこれや/Free Activities
- P.04. 研究科主催講演会報告/今後の研究科予定



発行：立教大学大学院：  
21世紀社会デザイン研究科  
編集責任：中村陽一  
編集主任：樋口祐加  
編集・取材 院生  
発行日：2002年9月20日

▶東京都豊島区西池袋3-34-1 〒171-8501◀



日本初！

< 社会組織 > < 非営利組織 > < 危機管理 >

3つの分野を学べる大学院開設！！

## 21世紀社会デザイン研究科設立理念

### 研究科委員長 門奈直樹教授

ニュースレター第1号を発刊する。このレターは本研究科の教育・研究活動の理念を学内外に知らせるとともに、本研究科所属の教員や学生が日頃の教育・研究活動の実践の場でどんなことを考え、如何なる問題に挑戦しているかを率直に語り合いながら、お互いの情報を共有し、それらをもとに切磋琢磨していく媒体として創刊された。

したがって、今後、紙面では教員、学生の双方から様々なイシューがとりあげられ、語られていくことになるだろう。そして、本研究科が目指す方向性と思想性がこのレターからご理解いただけるのではないかと考えている。

ところで、あらためて述べる必要がないかも知れないが、本研究科は21世紀市民社会のグランドデザインを描き、それを実現可能にする人材育成の場として本年四月に設立された独立研究科である。そこには如何なる時代的要請があったのだろうか。

周知のように、20世紀末に始まった近代の社会分化構造の地殻変動はポスト・モダンと言われて久しい現代社会において、振動の幅をますます大きくしつつあるやに見える。その地殻変動の中で、人類社会が過去に築いてきた文明システムはもはや維持することができなくなってしまったし、また、維持したいと望んだところで、そうした文明システムを支えてきた社会運営上の知恵が有効性を失いつつある現在、私たちが生きる未来は混迷の度合いをいっそう深めているように印象づけられる。

そうした状況の中で、人類社会に今、求められるのは過去の文明システムが経験した巨大な地殻変動の本質を見極め、新たな社会運営のスキルを発見・創造していくことではないだろうか。そう思うと、本研究科の学生諸君にはなによりもまず、日常の暮らしの中で、生活と社会との関わりを洞察する力、すなわち社会構想力と、未来を見通すために過去を振り返りながら、自分の拠って立つ基盤を確立していく力、未来構想力を育てていってもらいたいと願う。そのうえで個々の研究テーマに接近してほしいと考える。

「コミュニティデザイン学」「危機管理学」「社会組織理論」で構成される「比較組織ネットワーク学専攻」の大学院は本学において他には見られない。本年四月に入学した七四名の学生諸君にはこの分野における研究の文字通り、開拓者になる可能性があるし、また、特任教授を含めた私たち10名の専任教員には多数の非常勤の先生方の助けを得て、開拓者を育成するための質の高い指導性を発揮しながら、情報・知識を蓄積し、世界に通用する人的ネットワークを確立する戦略構想が求められる。このニュースレターはそうした学生と教員の思惑が交差する中で、21世紀のすぐれて開かれた知的共同体創世の媒体として発刊されたのである。意図を諒とされたい。



## 『21世紀社会デザイン研究科の戦略』 北山 晴一教授



「21世紀社会デザイン」ということですが、具体的にはどういった内容の研究をするのでしょうか？

21世紀社会の組織運営はいかにあるべきか。これが21世紀社会デザイン研究科設置の基本理念です。本研究科では、「コミュニティデザイン学」「危機管理学」「社会組織理論」という3つの分野で研究教育活動を展開し、社会組織運営に関わる専門的スキル、マネジメント能力を体系的に学び、MBAを取得することができます。「コミュニティデザイン学」分野では、いま新しい社会組織の柱として注目されつつあるNPO、NGO、ボランティア活動など多様な非営利組織のマネジメントを、「危機管理学」分野では、21世紀社会に必要とされる多様な危機管理のノウハウを修得します。そして「社会組織理論」分野では、人類社会が経験してきた社会組織の有り様を歴史的、社会学的に考究し、新しい社会運営ビジョンを構築できる能力を養成します。

ほかの研究科と違うところは何でしょうか？

本研究科の教育方針の特色は、社会に関われた大学院であることです。専任教員、特任教員が学外にも豊富なネットワーク（自治体や産業界、各種財団、公益法人、非営利組織、マスコミ等と強力な連携）を活用し、あるいはゲスト講師、あるいは講演会といった形で、社会のニーズにつねに柔軟に対応できるカリキュラムを展開しています。また、多くの科目が、社会人が学びやすいように夜間にシフトした時間帯に展開されています。

研究科の現状はどのようになっていますか？ どのような方たちが集まってきているのでしょうか？

初年度の入試には多数の応募があり、とりわけ社会人からの反応が大きかったといえます。研究科への期待の大きさに励まされるとともに、かつ社会的な責任の重さに身が引き締まる思いです。受験者、入学者ともにそのプロフィールは非常に多様で、おもな入学者種別をあげれば、自治体職員10名（県5名、市区5名）、国職員2名、大学教職員5名（教員1名）放送局職員2名、公益法人・NPO関係者10名、広告会社2名、薬剤師、代議士秘書、などとなっています。私企業社員のなかには、大手ハイテク企業の部長から高校長に転職予定の方が入学しています。

研究科の将来戦略を教えてください。

非営利組織運営と危機管理学の分野での研究教育活動は、日本ではまだ始まったばかりです。学会活動、講演会の引き受け、共同研究の企画など、この分野におけるトップランナー大学院としての社会的責任を、教員と学生、修了生が一体になって担っていきたいと思います。本研究科には、すでに企業や、自治体、非営利法人、あるいは地域の活動組織をはじめとする各種・各地の諸組織から、相互連携、協働活動の引き合いがいくつも来ています。職業経験の豊富な学生諸君のプロフィールを見ていると、今後は同級生同士、あるいは教員と学生諸君とが手を携えて起業活動を始めるのも時間の問題でしょう。なお、本研究科の教育課程には、現在修士課程しか設置されていませんが、近い将来、博士課程を設置して、非営利組織運営と危機管理の分野で研究者養成も行う予定です。研究科に関わるすべての皆さんの支援をお願いする次第です。

## 院 生 生 活 2 4 時 間

## 村田 素子

現在私立大学の職員をしています。主にボランティア、宗教、各種講演会等に関する情報提供、企画、運営、相談を行っています。

大学院進学については、今勉強をしたいから決めたことで、仕事との兼ね合いについて躊躇することはありませんでした。最も、上司の理解があり勤務体系もしっかりしているため、悩む必要がなかったということもあります。

研究テーマは「大学におけるボランティアセンターの役割とその実践にむけた取り組み」で、現在の仕事上の課題そのものです。

1年目の前期は火曜、木曜の夕方、土曜の午後、それぞれ2コマずつ取りました。平日の授業が終わるのは21時40分です。

授業のない平日は職場から自宅近くの区立中央図書館に直行し、文献などを読むことが多いです。学期末の週末は特に図書館に通ってばかりでした。その他心がけているのは健康のための運動、夜12時就寝（これは美容のため？）と遊ぶこと。勉強と仕事で生活を終わらせたくないで、意識して遊ぶ時間を作っています。映画は月2本映画館で見る、が原則です。

進学して一番よかったことは幅広い年代の様々な肩書きを持つ仲間達に出会ったことです。様々な価値観に出会い、たくさんの刺激を受けていることを身を持って感じています。

## 高橋 一夫

立教の大学院に入学して、はや、前期が過ぎました。立教の持つ学風に染まったのは、20年前の学部生の頃からですから、2度目の立教生です。私は、大学院から北に約400 Km離れた宮城県の職員として、仙台市に居住し、勤務しています。

私は現在、この大学院の主要研究であるNPOに関わり、自身でもNPO法人を設置したいと考えています。また、海外での経験からも国際社会での非営利活動にも惹かれ、NPOを研究対象に選びました。

立教伝統の雰囲気の良いさは、実に素晴らしいものでしょう。根底にあるキリスト教の精神は随所に現れており、教授、職員、そして、同じ院生にもその気持ちの良さは浸透しています。

また、週末だけの学生生活というもの、精神的にリフレッシュしていいものです。しかし、仕事と勉学を両立させるには、周囲の理解と支援が必要ですが、必ずしも社会はそれを許さないこともあります。だからこそ、価値があるのかもしれない。

大学院に行くのは、何を求めるためなのか？とよく聞かれますが、今は常に前向きに生きたいからとしか、私は言えません。社会に役立つ人でありたい。また、そういう人を育てたいと願うのは私だけではないでしょう。私は勉強も仕事も、そして、生きることも、自分だけのことは思えないのです。誰かのためになるだろうと信じていることが、きっと支えになると思います。皆さんはどうでしょうか。この問いを拙文の締めくりにいたします。

## 『私の講義を受講する諸君へ』

笠原 清志教授

21世紀社会デザイン研究科では、組織論原論を担当している。組織という分野は、企業組織のみならず、行政、学校、教会、刑務所等も一つの組織という視点から考察するというので、多少、経営組織論とは異なっている。

当研究科では、組織一般の基礎理論とともに、NGOやNPOといった民間・非営利組織についても講義している。NGOやNPOも、少人数でボランティアに基づいて活動しているうちはそれほど問題にはならないが、専従者を必要とし、メンバー数も大規模化すると、組織のサステナビリティ（存続と維持）やマネジメントの重要性が高まってくる。しかし、今日の日本のNGOやNPOにおいて、この組織のサステナビリティとマネジメントの分野こそ、その研究が遅れている分野の一つであろう。

21世紀の社会では、国や企業でもない、市民に基づく第三の公共性をどう創造していくかが問われている。とりわけ、国による上からの近代化を推進してきた日本では、官主導の社会・経済構造の存在だけでなく、一般の人々の意識の中にも「お上」への依存と期待があまりにも強い。第三の公共性を創造し発展させるためにも、受講している諸君の一人一人が自らの職場や組織でこの問題を考え、深めていってほしいと思っている。

## 院 生 研 究 あ れ や こ れ や

リスクセンスを磨く 上 純江

現在、山下勝也教授の指導のもとで、「リスクマネジメントにおける組織の有効性について」の研究を進めています。リスクマネジメントに関する文献や論文では、往々にしてリスクは個人に内在するものとされ、どちらかという現時点ではヒューマンエラーについての研究が主流のようです。

しかし、実際人間が不慮に起こす事故を事前に予知・予防することは殆ど不可能と考えられており、また、行き詰まりつつある今日の日本経済において、企業に内在する様々なリスクはいつ顕在化してもおかしくない状態にあります。そこで、今、日本のリスクマネジメントに必要なことは、そのような企業の組織を、有効に再構築することによってリスクを回避、または消滅させる事ではないかと考えたのです。

企業に内在するリスクとは何か？リスクマネジメントに有効な組織を構築するためのファクターは何か？そういったリスクセンスを養うという目的から、山下教授の演習ではリスクのケーススタディーに取り組んでいます。

21世紀社会デザイン研究科は今年新設されたばかりの大学院です。加えて、危機管理学という学問が確立していないこともあり、研究はほとんど手探りの状態です。

しかし、戸惑いもありますが、仲間達とのセッションの中で得るものは大きく、そこから社会へ発信できるものを作り上げていきたいと考えています。

「図書館」生き残りへの挑戦 鈴木 均

私のテーマは「公共図書館が市民社会にもつ役割と可能性」というもの。端的に言うと、「絶滅寸前の司書という人種は、どうしたら生き残れるのか」ということです。

これは指導教授の入山教授に、入学の面接でいわれた言葉で、正直ここまではっきり言われて面食らいました。しかし、改めてその崖っぷちにいるのだと思い知らされもしました。

現在自分は公共図書館で司書をしています。好きで入った図書館で、好きでやっている仕事なのですが、現場では、新刊本と古本の山に押しつぶされつつ、貸出の冊数の増減に一喜一憂するばかりです。ここに自分がいる意味、司書という専門家が意味は失われ、安上がりな行政サービスというだけに埋没してしまいそうなのです。

図書館でもっとできることがあるはずだと、心の中では思っても、外の人にそれを説得する言葉を持ち合わせません。何とかそれを形にしたい、それが出発点です。

院生の間では鬼軍曹の異名をとる入山教授は、入学面接で何人も泣かせたという評判。歯に衣着せぬ物言いですが、その論理は明晰で、さすがに海千山千を感じさせます。図書館には門外漢だよ、といってはばかりませんが、なに、図書館の専門家はどこにもたくさんいます。私自身がどこから切っても図書館しか出てこない人間であるだけに、外から眺めるその冷徹な視線は、私にとって何より貴重なものとなっています。

## Free Activities

## 「フィールドワーク in 三島」



コミュニティ・ソリューション論（中村陽一教授）の講義の一環として、希望者を対象に7月27日（土）特定非営利活動法人グラウンドワーク三島の活動を見学してきました。当日は快晴で、大変な暑さの中を、事務局長の渡辺豊博氏、磯崎剛氏が詳しい解説を交えて案内をして下さいました。水辺環境をいかに綺麗にし、維持を行なっているのか、住民を主体としたその実現への過程と継続の大切さ、団体運営の醍醐味などについて、見て、聞いて、感じる事ができました。

全体として、参加者全員が、現場を実際に見ることの大切さと、活動に関わっている方たちの熱意を感じた一日となったのではないのでしょうか。

（報告：草水 美由紀）



「サイバーセキュリティの重要性について」

講演者：田尾 陽一氏（セコムトラストネット株式会社 代表取締役社長）

今や日本においてもインターネットにおけるネットワーク化が急速に進んでいます。しかし、地球規模で広がっているネットワーク全体の安全は果たして誰が担っているのでしょうか。国家でもなくしかるべき機関でもないのが現状です。

今日、インターネットの急激な普及に伴い、市民のライフスタイルそのものが変わろうとしています。その一方で、不正アクセスやプログラムの改ざん、サービスの妨害といった国や企業、個人に対し、さまざまなネットワーク上の脅威も増大しているのも現状です。このため、健全かつ安全なネットワーク社会を確立するためには、地球規模でのセキュリティ基盤を構築しなければなりません。

現在、各市町村では国のe-Japan戦略をもとに電子政府に向け、住民票から税務申告、公共事業入札など様々な対応に向け構築が始まっております。そしてまた、各企業もe-ビジネスを中心に電子市場や受発注、コンテンツ流通等、電子商取引（EC）市場を、急速に拡大しています。消費者もまた、証券取引、各種販売、オークション、座席予約、ショッピングモール等毎日の生活に欠かせないものとなりつつあります。これらの各種電子取引の安全性を確保するために、電子署名・認証法が2001年4月施行されました。

あらゆる脅威（盗聴・改ざん・なりすまし・侵入・妨害・不正アクセス・機密漏洩・ウィルス）が、個人はもちろんのこと、国家や企業、非政府組織等へと拡散していくなかで、これらの脅威に対抗する新しい形の防衛手段への投資は、今後とも増大せざるを得ないものとなることでしょう。（報告：瓜生ふみ子）

「NGOと危機管理」

21世紀社会デザイン研究科では「NGOと危機管理：シビル・ミリタリー・コーポレーションとは何か」のテーマで研究会が開かれた。

基調講演に立教大学同研究科の伊勢崎賢治教授（前国連シエラレオーネ使節団武装解除統括部長、前国連東チモール暫定統治機構県知事）パネラーとして、現場で活躍するNGOの立場からピース・ウィンズ・ジャパンの大西健丞氏、日本で活動する本部側の立場から森祐次氏（前UNHCRアジアNGO協議会代表、前AMD A 事務所長）そして現場に派遣されるPKO員の立場から渡邊隆氏（元カンボジア派遣PKO隊長、防衛庁一等陸佐）を迎えて、多様な切り口からの意見交換が行われた。

一旦現地に入ったら「介入者」と見られる現場支援の厳しさ。銃を携帯したガードに守られながら活動を行わなければならないこともある。「武装」が過剰でも、少なすぎても、多くの人

に危害を及ぼす可能性がある。非常に微妙なバランスと判断が必要とされるのが現場の世界だ。すでに多くの犠牲者が出ている人道援助。どうすれば安全は確保できるのか？



国連の保障がない中で、NGOは自ら危機管理することを求められている。現実を見据えたとき、傍観するだけの平和学は通用しなくなっている。その一つの解決策が、「強圧的な印象がある」PKO部隊に対して、優しさが伝わる「NGO」の役割をより前面に出した、バランスのとれたコラボレーションではないか、との指摘がパネリストからなされた。（報告：間中恵子）

今後の研究科予定

研究科専攻主任・教授 中村 陽一

21世紀社会デザイン研究科という「新しい挑戦」が始まって、はや5ヶ月。教員スタッフも院生も皆頑張っています。既成概念にとらわれない創造的な科目編成により、社会人を中心とした人々が自らの経験知と専門知を突き合わせ、新たな市民知を紡ぎ出せるよう、秋以降も新規講座を開設します。

その一つが、公開セミナー形式の寄附講座「21世紀社会デザイン研究科の見取図」。9月28日から10回にわたり多彩なゲストを迎えて開講します。（毎回土曜午後3時～、第1期・9月28日～10月19日、第2期・11月16日～12月14日、第3期・2003年1月11日～1月18日。11月23日は祝日で休講）第1回講師は金子勝慶應大学教授。以降、浅野史郎宮城県知事、伊藤助成日本経団連1%クラブ会長、作家の森まゆみさん、エコマネー提唱者の加藤敏春国際大学教授などが登場予定。院生はもちろん、受験を検討されている方、一般の方などでもご参加いただけます。大学院の雰囲気を感じ、先輩院生にも話を聞くチャンスです。なお、本講座は特定非営利活動法人21世紀コープ研究センターの寄附による講座です。

秋入試は10月26日（土）～27日（日）、進学相談会は寄附講座時に随時行います。本講座・入試につきましては、HP及び入試要項をご覧ください。

21世紀社会デザイン研究科 学年暦（後期日程）	
後期授業開始	9月20日
当研究科秋入試	10月26日・27日
秋季臨時休業期間（学園祭）	10月31日～11月6日
秋季入学試験（全日休講）	11月9日
クリスマスイブ	12月24日
冬季休業期間	12月24日～1月5日
当研究科集中講義	12月26日・27日
当研究科集中講義	1月14日～17日
当研究科集中講義	1月20日～23日
当研究科集中講義	1月27日～30日
後期授業終了	1月11日
後期末・学年末試験	1月中旬～下旬